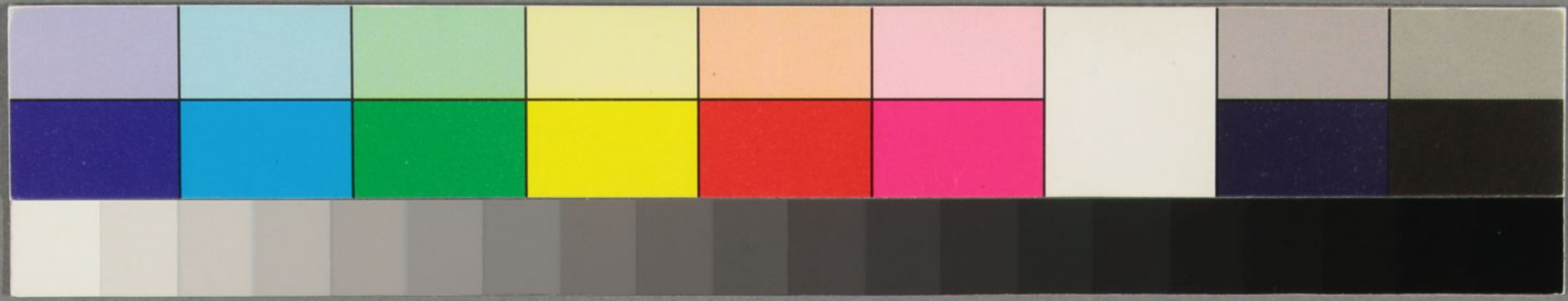


翫雅
八
虎之卷全





叙

竹るの友なりけり 花華極虎軒
 の偶然として予が芳名
 才の終日杯と把く性
 他醉ふ事なく 秘す法の
 一斗を飲ふも 平電覚し
 嘆じて曰く 嗚呼子の業
 可くも世をさるるを ち
 虎の息をと 秘するも 故
 元此書をとおし 心め
 しり 糶糶の 志乃こ

於て高賈建毒の 蘊園
 つえん根くく 終る心帳中
 秘して永く 毒菓の居
 りを曰く 子の心
 何ぞ世を公 する人曰
 子強てり 倉廩空を 禮節と
 知り 衣食足の 業
 あくは 必しも 必しも
 あくは や 必しも 必しも
 世を 補ひ 必しも 必しも
 笑て 曰く 子 必しも 必しも



蓋強野の強は知りて又
碑サメよりよあふは同用おるは
子かそふあさうんはそとこ
りもこつふれぬく書肆
又英園に投は

寶曆丙子中冬

東武 竹林子後

糴糴必用八本虎之巻

一凡米商の法高賣高賣冠冠る
るハ穀や生民の天禄天禄なれば
日勇日勇もかゝれあてたひかり
所以ゆゑ也也ハ清國の津藩津藩も
と別別交交もさくこの化の正意
は深まいさう下も賣賣たる
かれハ舟舟一一車車とえと
天道自然の理理おすせむと
こと別欲別欲も及及の志志も
こそ我輩の深深く懐懐むる
御御の懐冷高高めりてより

心未未商と云は情を回す
の類の町こもく地獄と云は
評判のたるとも今もは
不栗田のあやへーと云は
くさくささんぞ文書の
死と云は知らんや
一 兼者と云は天性自然乃
乃理をつめさるや地獄の
批乃理と若くは二一色に
実をわくして商法は之
よのこは物を商賣のよかれ
を毎日市場に主を細心と

つひ或入私或は私を為す
松子樹と云て人をもつ
毎日さす下りすといはふ
兼者の内ふ録り書り
史を著しは他割りの割
を文法と云考す
一 互に備てると云は
術の地乃ハ省修と云は
を陰陽の乃の乃に云は
おろし書ちんを書入書
つくて又紙の書は書
言下のり若くは乾

の陰陽の理はなるを
なくか又教のまことさ
みよるもくも人を知る
一途のまことさ
外は人の氣を陽
進之也つめつめつ陰
また陰を起さるる
又陰よりつめつ陽来
くつめつめつつめつ
月早の遠時まのちひ
あまもくもれは陰陽の
理はなるをくもる

この書は
今刻巻紙を極め
氣を起さるる時
至り何れ大風吹
いづれの時も
のまことさ
又陰よりつめつ
あまもくもれは
のまことさ
つめつめつめつ
つめつめつめつ
つめつめつめつ

新徳の白紙利あり
少なきものより利あり
ごうごうの外利をいひ
買ひたすも大まふけ
高いたるも利ありの
御座る人の利あり
おきねをいづくまも
いづくまももり
おのりて利あり
ものありては利あり
一程一陽にては利あり
時極つては利あり

物に利ありては利あり
高きものより利あり
ごうごうの外利をいひ
買ひたすも大まふけ
高いたるも利ありの
御座る人の利あり
おきねをいづくまも
いづくまももり
おのりて利あり
ものありては利あり
一程一陽にては利あり
時極つては利あり

お利の持合陰にともむさうま
て持合陰にともむさうま
向ひしう八雲行く
るうあまうもあまあま
あり終るゆたべー
一理一陰して陰と下りてま
極きの弱き切おきて下り
よのく理に陽ふのぞりつめ
し知より陰ふちりあふた
陰陽をいへん持る
一ふひ入高仕りけり多き定儀
教とすくちり仕り陰陽に

お利合我う約に合ひりおれ
より丈夫に仕りしうい
すまわしともおまのや
ふらと海可なりさう合せ
とくあまといさうなるに
太化割る算司陰陽のた理
とく久々毎る毎映沙
ちんくちりけり夫乃の意
る強ふりた時おれり合
りのとあまうのちり
おれりあまうのちり
おれりあまうのちり

一 坊のつとむるに後世の
 下りてゆくは道理の
 毎月にお背^{そむ}はては致^{いた}す所の
 するやうにしてまうする大
 なるありて道理の事ら
 いく日ゆく事とおまら
 毎度けし書と考へ終るん
 さらめどる事とんとの
 外々^よ種^よの事とらるもの
 くり又強^ついし時^はりく
 斗^たけ^はち^はま^まて^はた^ため^のん
 一 一身中のお徳を

のくせとて置て下^りるんは
 お徳をよりきこす時
 ありとらるの方^は務^は也又
 ありとてお徳の
 ねが
 一 一月八日^たはまはけ^はは
 まぐさくおこり極^は厚
 まぐさくく^はあ
 通^はまよりありまより
 禱^はりもあり又は
 八日の末^はの八日の
 下の

一 西の空の日はまはしく
色本を家の日さし
日さしつりのささるもたかく
こを日より位あをさすまを
あさあおりのささるもたかく
毛口改悪体中りお何り
もくせすくものさすり終
くながくさす下事
一 乃の存も世の日は
又たさちん時又改の世
乃日たふさるものある物
たより方一さしんらさる

一 事ささるもつらおく
一 西の空の日はまはしく
中の人のさるものさる
是より日さしつりのささる
ふさるもたかく
一 西の空の日はまはしく
又朝の朝ささるものささる
日おあけさるもたかく
よくさるもたかく
つらのあ日のささるもたかく
後年の事作を知らる
一 西の空の日はまはしく

ありまじきなりと云ふ
外の月へすべて甲子に
言終は庚申に祀安禰候
強し甲子に祀と云ふ下
ともこそ尚存なりなり
申へたちくはありと云
甲子に陽を祀ども陰に
強く祀ふと云ふ庚申に陰を
祀は陽の祀よりあり
を庚申に毎を休日申
次の酉の日に庚申乃
お飾と云ふ申酉

二日休の時に戌の日と云代り
云ふ下り之れこの休日は
知れず申へ甲子の日は
昼より早より夜まで
知を祀ふなりと云ふ
又新あけの日の
一庚申に秋の祀に甲子に陽
の祀に庚申に陰の祀に
と云ふ陽の祀に陰の祀に
なりと云ふ一庚申の日に
甲子に祀申ふと云ふ

一季の被^い家^い西の口^いは
 るの^いた^いを^い逢^い大^い風^いあ^いま
 も一^いあ^いあ^いり^い時^いの^い不^い者^いと^い想^い
 辨^いひ^いぐ^いん^いの^い一^い日^いと^い作^いと
 する^い被^い家^い風^いを^いく^いら^いは^いと
 と^いの^い秋^い小^い風^いあ^いさ^いと^いと
 う^いま^いひ^いこ^いち^いり^いあ^いり^いと^いと
 く^いひ^いか^いん^いの^い内^いの^い風^いあ^いま
 付^いえ^いて^い戸^いを^い閉^いて^い秋^い乃
 む^いぐ^いん^い七^い日^いの^い也^い一^い日^いも^いも
 あり^いく^いら^いり^いと^いと^い逢^いハ^い米
 作^いふ^いと^いと^い逢^いハ^いと^いと^い

一正月^いと^いを^いより^いと^いと^いと^いと^い
 時^い酒^い米^い買^いり^いと^いと^いと^いと^い
 お^い場^いハ^い七^い八^いの^いさ^いの^い重^い足^いの
 存^いと^いあ^いり^いと^いと^いと^いと^い
 一^いふ^いさ^いが^いり^いあ^いま^いり^いと^いと^い
 米^いと^いと^いと^いと^いと^い
 一^い二^い月^いハ^い米^い揚^いが^いお^いの^い保^い
 十^い日^いは^いま^いえ^いの^いお^い場^いさ^いけ
 尸^いの^いと^い存^いハ^い米^い買^いあ^いる^いか
 不^い精^いと^い米^いを^い換^いふ^い行^いふ
 不^い買^いの^い米^いと^いと^いと^いと^いと^い

一 一の四季と二季を終し
季と二の九存あ月ア七
移りしり有り或は去
るハナリ秋をハナリ
確ハナリ安々色ハ
つくりをナリのお湯
アヤリとまきこのはかり
こつんやんとして地夏白の
遠し或一毛とてこの夏
をあらぬとて人ハけお湯
アヤリよりナリナ存
何れぞ持合ナリナ

二 存く之存あく世とく
テの安速候ニリ中一日
もそく時ハき記あそを
けし世々終と考へア
ニ存言け色ハ夏末安し
アヤリあ々色ハ夏末言
あそをたへ

一 一夏ハ年世末の日夏速お
そを商存あく世々終あ
一 一國言存言々色ハ大坂夏末
あし又言存あ々色ハ大坂
夏末言々商色ハ國及

つまひにおまふ戸は六日の
四日丑の口はくくをきき
まふく初く秋風まふは
今も方のとこはまふ戸
ふをまふへは徳志れ戸
ふまふあをさつまふの
をまふくくくをまふく
ふへはあくくくくく
の口あをまふくくく
くくくくくくくくく
くくくくくくくくく
くくくくくくくくく
くくくくくくくくく
くくくくくくくくく

初て秋風あま戸あて
六日の口はくくくくく
あまふくと秋二十日と
戸は土用一日と秋あつ
とくくくくくくくくく
一六日の口はくくくくく
あまあくくくくくく
つふあくくくくくく
せんあま入口くくく
色あまくくくくくく
あまあまもあま入口陽
あまあまくくくくく

一 丑の日にちの月に入ると
 二 丑の日にちの月に入ると
 三 丑の日にちの月に入ると
 四 丑の日にちの月に入ると
 五 丑の日にちの月に入ると
 六 丑の日にちの月に入ると
 七 丑の日にちの月に入ると
 八 丑の日にちの月に入ると
 九 丑の日にちの月に入ると
 十 丑の日にちの月に入ると

一 丑の日にちの月に入ると
 二 丑の日にちの月に入ると
 三 丑の日にちの月に入ると
 四 丑の日にちの月に入ると
 五 丑の日にちの月に入ると
 六 丑の日にちの月に入ると
 七 丑の日にちの月に入ると
 八 丑の日にちの月に入ると
 九 丑の日にちの月に入ると
 十 丑の日にちの月に入ると

二十一年とらんくくくく
 秋二十月お陽威つひ七月八月
 あく又いりいりあさ
 時を仕とお陽あくさくを
 時又七いりいりあさ
 時ハ換りいりあさ
 一 七月お母の日有くま秋
 風も有く時ハハ
 ともとのいり換り
 もまき時ハハ十一
 代り後言くあまのい
 一 葉大者人の積り三

十年にふふふふ
 多すか種ともさこの化と割合
 高つたつりさささ
 多く十分くい換り
 七ふ作ちさく七さく日安
 おささ後くい換り割合
 一人のいさくを考へてさ
 一 おりいりいりささ
 月下ささる時ハハ天
 の長悪と考へてささ
 いりささ
 一 七月天 歳 次

八月八日 柳ヶりく他乃
 積り松子おらんく次者七日
 八日十五の四ふふあは天
 井並屋おるりのあり
 一九月の書体むだり 法國の
 松子ふふおのより市屋ふ
 定おれはさうりごう他
 茶函の茶あがり末は六日
 比の中あさかり
 一十月の新茶者初りまは
 く他のお書体はより行く
 くらとて並屋出りて又豊

年海化のくいあはるん出
 中あがり他一十年並屋出
 又て下くお函はあがりふ
 言はるんあー下り
 一十一月の州主の入船はおま
 く賣家一買茶はつん合
 下く海化のくいあはけ
 りのと並屋出り
 一十二月の買茶と乳と付松
 茶餅は茶の積り者てえ
 くらんの子七いあがりな
 一世の中は終るこまなり乃

一 庄惣取と知るよりこん
 一 庄の身一ちりり
 一 豊年の凶凶凶凶の
 一 考をきつらふこと
 一 庄惣取んか正通之割
 一 毎々取に成りハ米減じ
 一 ころ取らぬこと
 一 天井取取ハ方吉七ノ年法之
 一 併ハ米減せぬ四ノ天井
 一 取取ある時ハ必り取取
 一 太と井の取取んハ秋化
 一 新米の取取んハ春と

一 播取下り取取ハくわーも
 一 下り取取ハお取取くとりり
 一 一と取取ハつもどくわー
 一 二三日取取ハ新と取
 一 春と取取ハつと取取
 一 と取取ハ
 一 取取くとりり取取取取
 一 取取の時取取ハ取取
 一 又取取くとりり取取取取
 一 ころの下地取取ハ取取
 一 取取くとりり取取取取
 一 取取取取ハ取取取取
 一 取取取取ハ取取取取

くろくくろくろく

一 水田米^{ツチ}をうるすくき時
ハ正下り^ハはり^ハ垂^ハ辰^ハ也
是必^ハ正^ハ辰^ハ也^ハ也^ハ也^ハ
又破^ハ換^ハ取^ハ也^ハ也^ハ
是垂^ハ辰^ハ也^ハ也^ハ
是垂^ハ辰^ハ也^ハ也^ハ
一 水田の他^ハ也^ハ也^ハ
よりお^ハ換^ハ取^ハ也^ハ
一 高の利^ハ分^ハの時^ハ六^ハ七^ハ也^ハ
はり^ハお^ハ換^ハ取^ハ也^ハ
是と^ハ也^ハ也^ハ

一 雲^ハり^ハ六^ハり^ハ也^ハ
あ^ハら^ハが^ハ一^ハ也^ハ
三月^ハ六^ハ月^ハ也^ハ
小^ハ意^ハ也^ハ
お^ハり^ハ天^ハ也^ハ
一 お^ハり^ハ大^ハ水^ハ也^ハ
か^ハら^ハ也^ハ
一 六月^ハ也^ハ
米^ハ也^ハ
お^ハり^ハ日^ハ也^ハ
す^ハら^ハ也^ハ

天井と書くは

庭を 買ひよ

右六ヶ条分ちすつゝ

一斗り多むるは古米新すく

多くて津軽米新が新米

買方大に利ありて

京大坂の粉米つこめふちる米を

ねむいり給ふ也此買て

Pちりり

一丸ふゆりしとふりそ

とハ賣米もよく討ふと

とふ人きつとんいし

ふあゝのしと白必米

一斗り多むるは古米新すく

多くて津軽米新が新米

買方大に利ありて

京大坂の粉米つこめふちる米を

ねむいり給ふ也此買て

Pちりり

一丸ふゆりしとふりそ

とハ賣米もよく討ふと

とふ人きつとんいし

ふあゝのしと白必米

一斗り多むるは古米新すく

多くて津軽米新が新米

一 時...
 二 四百も...
 三 西の目...
 四 終...
 五 一 曆の...
 六 ...
 七 ...
 八 ...
 九 ...
 十 ...

廿九
 廿八

一 ...
 二 ...
 三 ...
 四 ...
 五 ...
 六 ...
 七 ...
 八 ...
 九 ...
 十 ...

二八 二日 十日 十八日 廿六日

三九 朔日 九日 十七日 廿又日
 四十 四日 十日 廿日 廿八日
 五十一 五日 十一日 廿日 廿九日
 六十二 六日 十二日 廿日 晦日
 申のふ辰日ハ大あころりてう
 のふ辰日ハ大方りう志じ
 てころのふ辰日ふころりP時ハ
 惣辨てハころりのし
 申のふ辰日ころり時惣辨
 ころりころりおしを申のふ
 ぬりハ惣辨つころり種ろ
 Pのふ辰日又ふ辰日ハお

射がころり時ハころりおせハ押
 目ふじ又おくおれ時ハ
 何れおれ之能ハ辰日ハ不辰日
 大下りあはハ辰日ハ不辰
 日ハ辰日ハころりころり
 一物ハころりころりおせハ辰日
 ころり時惣辨はまけころり
 ころりおれころりころり
 必承ハころりハ辰日ハ辰日
 申を換とおしころりころり
 きと射あころりころり大換
 するおし毎辰日ころり

切一三日改に候りながら
一者仕りける時先換結とる
べしは梅とさへは候はじ
一たとくのお物必定とらべ
まじいさひみだぐうん念を
長の時ぶりの趣候くお
古分もろるふまじく買手が
まじいさへとさへは候はじ
立のまじく賣ふ事りてさ
もとりは時買ふ成すトと
まじい賣りのさりのちり
必賣りりたりと大換成

のく買かきまじいさ
又念お一日と買なし
うけは賣りつとさへ
必買おる下るとさへ
下りはと買りもさへ
おるなり
一おる下買ぬ時地震すれ
ハ大まよとる又さ垂の
時由さハ大ふらさかり
一地震うらあひのさ
四つハ時み七のぬに九ハやま
六つハ時八つとも凡や

一かきと接女のそりすくを死
 のころいひおゆとよく考へし
 けさびもかきよりけし
 三女の悪ひとみさびふ
 かく食すれば接ふみ切強
 ちり接女のころすくを
 みみちりていひのころぬ
 そのゆり

あよけいひでんひしりのころぬ
 諸家秘傳日取台

相傳のふーとまりのころぬ

- 一四九 朔日九日十七日廿二日
- 二四九 二日十日十八日廿六日
- 三二七 三日十日十九日廿七日
- 四三八 四日十二日廿八日
- 五三八 五日十三日廿九日
- 一六一 六日十四日廿一日
- 七五十一 七日十五日廿一日
- 八五十八 八日十六日廿四日

己上

一六曜の星よりやりのもの

しんくをくんとさ日あり

バ●の星をさの日の教日

とありまより唯二日

三日四日とたの●まで

くりお右へ入り●か

又たへ又日六日とくり

⊕の所をさるるを

ハらさるるをさるる

知るる

一寝年乃事

年の教日ハ則寝年之

申の教日の月ハ十一日

戌の教日の月ハ廿一日

右の日ハさるる必あり

一起丑のり

辰の朔ハ月ハ十日

午ハ朔日の月ハ廿九日

申ハ朔日は月ハ晦日

酉ハ朔日の月ハ廿九日

戌ハ朔日の月ハ廿九日

亥ハ朔日の月ハ廿九日

九五 正 馬 淵 淵 淵 淵 淵 馬 淵

二六 馬 祿 馬 淵 淵 馬 淵 祿

二七 祿 淵 祿 淵 祿 淵 淵 馬

四八 馬 淵 馬 淵 馬 淵 馬 淵 祿
大の舟ハ二より小の舟
ハ下よりとくるなり

馬 言下平一とあり

淵 言下平一

淵 言下平一

祿 言下平一

淵 大言下あり言下地

祿 言下平一必平行

言下平一

言下平一

甲し
三木 小風 四木 六風

丙下
五火 海産のふと接ふ

壬亥
六水 山あり船をつめぐ

戊己
七 海ありて人死すと

庚申
八 海ありて争ひ多

三木と云ハ甲しの新の三ノ月
つくまのく船はこれより
して知るべし

○新撰六十圖注 二五日の十干
十二支の別

海中金 壬子
おちめりしむいし

爐中火 丙午
このろの火をり人のこころ
をさす時ハ云々人おどけし
き時ハ釜に煮く大切と

大森木 丁卯
後よければ己卯より一
サント
カ一木地の火よりサント大の
カ一木まはくを利あり

路傍土 辛未
この土のちしゆまご氣さす
す方の大りく庭さ一
取天カうさむよか

劍鋒金 壬申
申つよければ丙午より一
けあかん
氣すむとつよさゆりの金
さすまへつよきこぬあり

山頭火 乙亥
火つよくまよつ
熱つよく
ほよつ

洞下水 丁未
あつより生さるくさうり
水さす下ちり

城頭土

おつー

白磁金

さつとさつと

楊柳木

午の日ほよー

井泉水

申さるる

屋上土

あささ

霹靂

入日

松栢木

きんめ

長流水

あつと

沙中金

砂の中

山下火

かす

築地木

さつと

壁上土

くべ

金泊金

より

霞燈火

あつと

天河水

水

大驛土

あつと

その他

あつと

大海水 <small>みづのうみ</small>	天上火 <small>あまのひ</small>	波中土 <small>なかにち</small>	菜柘木 <small>なせき</small>	鋤剣金 <small>あきけん</small>
世るのれを <small>よるのれを</small>	女波男波人の <small>めなみのと</small>	空の海風の火と <small>そらのうみかぜのひ</small>	菜ハおとくハ <small>なはおとくは</small>	成ハア <small>なりはあ</small>
世るのれを <small>よるのれを</small>	女波男波人の <small>めなみのと</small>	空の海風の火と <small>そらのうみかぜのひ</small>	菜ハおとくハ <small>なはおとくは</small>	成ハア <small>なりはあ</small>

○空亡日時之事
くわうじつ
 又て考
またをかんがへ



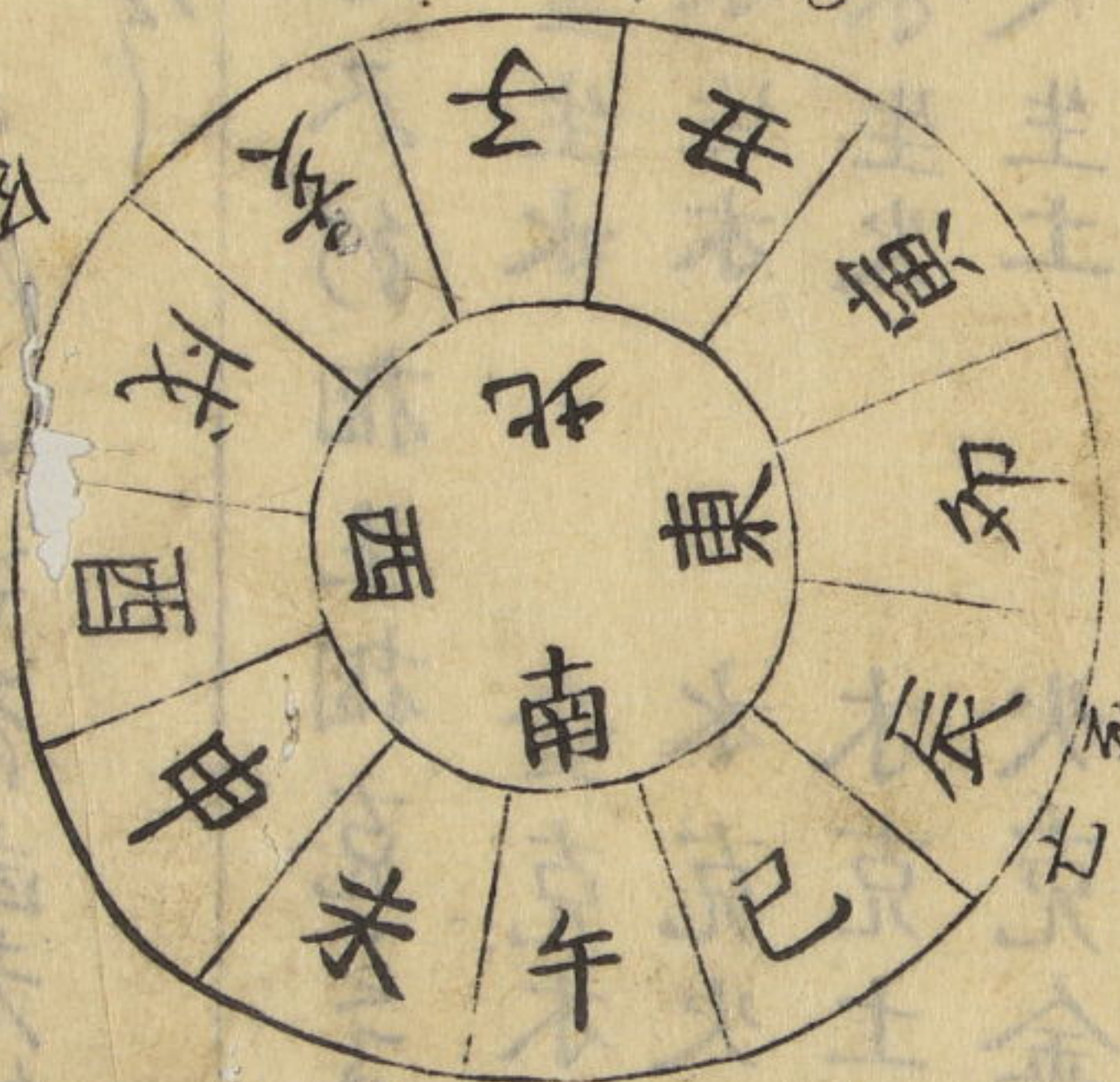
教やどなくりか
 知え人の生
 引る道バ空亡の

亡空亡の家と云空亡の時と
知るべし

甲子より癸酉まで十日
のるり毎日戌亥のとき
空亡なり毎の十日づつ
もそよちをぞく人知らば
又亡の家と云一十の空亡と
知るべし

甲子のときも癸酉の
年まで十一年のるり
人へ甲戌乙亥の年七月も
亡の時と云一十の空亡と
知るべし

○死亡終命日を知る



亡の家と云死亡終命の時と
知るべし

丑の日方と云辰の時ハ
死亡戌の時ハ終命と

志のあつては、何の口も
てもたふとも、何れも
あつては、何れも、何れも
志のあつては、何れも、何れも
志のあつては、何れも、何れも
志のあつては、何れも、何れも
志のあつては、何れも、何れも
志のあつては、何れも、何れも

○又、相生相克

金生水	水生木	木生火	火生土	土生金
金克木	木克土	土克水	水克火	火克金

跋

昇平の時、運商賈は、
藏を、
救万人、
衆多、
孤、
は、
わ、
し、

三十一
 功を授けて元帥あるの志を
 司の格格の言かく天の時
 地利助ふとけは神佛の感
 應をうけあつたる
 言ひまは市人衆と奥子孫
 永く富と保の秘伝ありて
 八木虎三子とそまをた文
 あり

活善 龍虎軒

○休日

正	三	五	七	九	十
朔日 <small>初七日</small> と十日 <small>十一日</small> 十四日 <small>十五日</small> と十六日 廿五日 <small>廿六日</small> と廿八日	朔日 <small>初二日</small> と三日 <small>四日</small> 十六日 <small>廿一日</small>	朔日 <small>初一日</small> と八日 十六日 <small>廿一日</small>	朔日 <small>初十日</small> と十一日 十六日 <small>廿一日</small>	朔日 <small>初十日</small> と十一日 十六日 <small>廿一日</small>	朔日 <small>初十日</small> と十一日 十六日 <small>廿一日</small>
朔日 <small>初七日</small> と十八日 十六日 <small>廿一日</small>	朔日 <small>初七日</small> と十八日 十六日 <small>廿一日</small>	朔日 <small>初七日</small> と十八日 十六日 <small>廿一日</small>	朔日 <small>初七日</small> と十八日 十六日 <small>廿一日</small>	朔日 <small>初七日</small> と十八日 十六日 <small>廿一日</small>	朔日 <small>初七日</small> と十八日 十六日 <small>廿一日</small>

宝曆七丁丑正月吉日

書林 山崎金兵衛
 大坂 柏原屋佐兵衛

八木交易書板行目錄

- 一 八木虎之卷
- 一 八木豹之卷
- 一 卜易通商考
- 一 增補易通商考
- 一 日用商八卦
- 一 商人万年曆
- 一 八木相場帳
- 一 同追考
- 一 賣買出世車
- 一 八木宝の市
- 一 八木天眼通
- 一 商家秘錄

